

アジア・アフリカ言語文化叢書 31

表象のオリエント

—19世紀西洋人旅行者の中東像—

高知尾 仁

アジア・アフリカ言語文化研究所

東京外国語大学

1994

STUDY OF LANGUAGES AND CULTURES OF ASIA & AFRICA
MONOGRAPH SERIES NO. 31

THE ORIENT REPRESENTED
IN THE NINETEENTH CENTURY

by

Hitoshi TAKACHIO

INSTITUTE FOR THE STUDY OF LANGUAGES AND
CULTURES OF ASIA AND AFRICA

1994

Institute for the Study of Languages
and Cultures of Asia and Africa
(ILCAA)
Tokyo University of Foreign Studies

4 - chome Nishigahara
Kita - ku, Tokyo 114
Japan

ludo cultus 研究会の諸兄に

©Copyright 1994 by the Institute for the Study of
Languages and Cultures of Asia and Africa

Printed by
Tokyo

目 次

プロローグ	1
序章 ^{オリエント} 東方のイメージ	11
1. 偽りの地	14
2. ^{ヴェーヌスベルク} 淫蕩の地	19
3. 暴力の地	23
4. 巡礼の地	28
1章 中東のテキスト化	43
1. 出会い	45
2. 派遣された旅行者	47
i アフリカ協会	47
ii デイレットタント協会	50
iii グランド・ツアー	52
iv 調査の旅行者	55
3. グランド・ツアーの延長	64
i 旅の変化	64
ii 中東教養旅行の情報網	65
iii 脱出者	68
4. 旅の軌跡	73
i 軌跡化された中東	73
ii パノラマ	77
I部 隠蔽	85
2章 ^{フレイク} 疫病 —— 環境論	87
1. 検疫隔離	89
i 隔離制度	89
ii 隔離体験	90
iii 隔離回避	93
2. 中東で出会う病気	94
i 中東の人々の病気	94

ii	旅行者を襲う病気	101
3.	疫病——ペスト	109
i	疫病恐怖	109
ii	ペストの病理学	110
iii	旅行記における疫病流行記述	112
iv	ペスト文学における疫病	120
v	中東の疫病	122
3 章	^{ミーディア} 気象 —— 自然論	131
1.	気象と自然・風土	133
2.	幻の姿と音	137
3.	荒廃の風景	140
i	神の怒りの風景	140
ii	砂漠と砂の世界	144
iii	石化の世界	147
iv	火山地帯	150
v	死の危険	155
4.	天候急変	157
i	熱風と砂嵐	157
ii	嵐と洪水	161
iii	難破	165
4 章	^{ティラニイ} 暴虐 —— 人間論	179
1.	欲望と暴行	181
i	盗賊	181
ii	エスコートの強欲さ	185
iii	暴行	189
2.	中東の政情	191
i	虐殺者	191
ii	抗争・陰謀・裏切り	196
iii	圧制と暴動	208
3.	社会関係としての暴虐	214
i	図式	214
ii	血讐と賠償	217

iii 敵対関係・襲撃・和平	219
4. テンプタテイオ	231
インターロード	239
5章 ^{アート} 技法 —— 道徳論	241
1. 馬とラクダ	244
i 騎乗	246
ii 特性	252
iii 役割と有用さ	256
iv キャラヴァン	265
2. キャラクター	270
i ^{デイスガイズ} 変装	272
ii 親交	279
3. 静寂の風景	286
II部 発見	299
6章 ^{ルイーン} 廃墟 —— 歴史論	301
1. 廃墟の美学	303
2. 廃墟風景	305
i イシスとオシリス, 死と再生	305
ii アドニス, バアル, アシュタロテ	312
iii 廃墟の ^{キャラヴァンシテイ} 隊商都市	317
3. メランコリー	329
i 廃墟とメランコリー	329
ii メランコリーとヨーロッパの伝統	333
4. ^{トポス} 場所と ^{クロノス} 時	337
i 破壊と忘却	337
ii 同定	344
iii 過去と現在	349
7章 ^{リバーズ} 再生 —— 宗教論	365
1. 聖書風景	367
i 遊牧の民	367

ii	泉の女	369
iii	ガリラヤの海	371
2.	聖なる場所——真正さと欺瞞	371
i	伝承の墳墓	372
ii	モーセの足跡	375
iii	イエスの足跡	381
3.	神の言葉の成就——預言と預徴 ^{タイプ}	395
i	滅びの都市	395
ii	預徴論 ^{タイロジ}	404
iii	山頂からの眺望	413
4.	再生の象徴	418
i	復活の花 ^{アナスタシス}	419
ii	レバノン杉 ^{シーダー}	420
iii	至福の谷，樂園の形姿	427
	エピローグ	443
	参考文献	447

プロローグ

私たちは、自らを、周囲にあるものにとりまかれた存在だと考えており、またそう考えてもきた。あるひとは、その「周囲なるもの」を¹⁾、無限の宇宙とイメージし、またあるひとは、触知し得る要素としてのみ考えた。有限の閉じられた抑圧の壁を想うものもいれば、豊饒の地の優和な庭園を想うものもいた。広大なる無を観るものもいれば、連鎖する存在を観るものもいた。私たちは、この周囲なるものを、種々に拡張もし、また狭めもしてきた。その周囲なるものの縁を、家や町の門から見える尾根の線から宇宙の縁に至る、様々なものとして考えてきた。いや、それよりさらに、広大無辺というように考えてもきた。観想や思考の傾向として、この自らをとりまく周囲なるものを、どのようなものにせよ、安定したものとして、私たちは考えてきたのではなからうか。不和や不安は、ときに融通のきく周囲の縁の外に出し、ときにより大きな思考枠を導いて取りあつかわれ得るものとして、再び自らの周囲の中にとりこむ、ということ私たちはこれまでしてきたのではなからうか。大は宇宙観の大転換から、小は日常的な不浄なるものの処理に至るまで。

私たちをとりまく周囲の縁というものは、その外に、私たちとは異質の存在、他者なる存在を意識するとき、具体的に問題となる。縁をはさんで対峙する自と他は相互の関心の対象となる。このとき、他者は、自らをとりまくものからある距離を持つものとして認識される²⁾。私たちの、他者に対する不安や好奇の感情は、この距離として具体的に現われる。

^{アンチレ}
[興味] は中間に存在するもの、間隔をおいたところに位置しているものである。私と、私の知らないもの間に興味は腰をすえている³⁾。

この距離は、他者への接近によって、主体的に克服されるものと考えられることが多い。こうして、私たちは、自らをとりまく周囲の縁の外へと、不安を解消し、好奇心を満すべく旅をはじめた。

隔たりをわれわれは望んでいる。それが時間をつくる。それがわれわれを不均衡にし、安定を乱す。そこからわれわれの運動、歴史が開始する。ユリシーズを風の中に地中海を旅させ、コロンブスをアメリカにつれて行き、そしてアメリカ人を西部に、われわれを科学の冒険につれていく。われわれは決して停止しない。はっきりなしに鼻をやぶの中につっこみ、足を未開の泥の中にふみ入れる⁴⁾。

中国黄河の流域を目のあたりにして、ミッシェル・セールはこのように述べているのだが、もちろん、セールの言う「われわれ」は私たち人類のすべてではなく、東方を旅するヨーロッパ人の「わ

れわれ」であるのは言うまでもない。セールの言葉から、旅の研究のはじまりに、距離の克服はその「われわれ」に固有のものだと論ずるのは少々早すぎる判断であろう。しかし、この距離を歩きつくし、計算しつくし、表記しつくし、利用しつくさんとした「われわれ」のエネルギーのすごさを思うとき、「われわれ」を私たちすべてにあてはめるのは到底無理というものだ。では、私たちの中で、突出して莫大なエネルギーを消費し、「足を未開の泥の中にふみ入れ」、人類学なる学問をつくりあげた、「われわれ」なるヨーロッパ人の旅とは、いかなるものであったのか。具体的なヨーロッパ人の旅を、ヨーロッパ人自身の旅の記述（トラヴェル・ブックス旅行記）によって明らかにする必要があるのではなからうか。

書かれたものとしての旅は、もちろん、読まれた旅でもある。実際に行なわれ、進行している旅のテキストは、読書のコンテクストに置かれて意味づけられ、意義ある旅が現出すると言ってよいだろう。他者をとりまいている空間は、旅するものの手によってテキスト化され、読者の手もとに集積されて解読される。旅の研究は、したがって、他者（の空間）と旅人と読者が作る旅の世界の研究であると理解されよう。あるいは、この三つの要素を、旅の場（トポス）と言語と時代（ペリオドス）、というように言いかえることができるであろう。そこで、ヨーロッパ人の作る旅の世界を明らかにするために、本書がとりあつかう、旅の三つの要素を明らかにしておくことにしよう。

ここでは、シリア、パレスティナ（あるいは「聖地」）、アラビア、シナイ、エジプト、ヌビアと名づけられた土地が旅のなされた場所である——もちろん、名づけたのは主に旅人と読者であって、旅の場の住人たる他者でないのは言うまでもない。ヨーロッパ人にとって、聖書の聖（あるいは正）なる地と偽りの地を意味する中東世界が、ここでは、旅のなされる空間であるということになる。

『オリエントの星の物語』の中で、ミシェル・トゥルニエが興味深い、この地の旅を描きだしている。ヨーロッパ人の旅というテーマからみれば、トゥルニエの描いている旅は逆の旅と名づけることができるだろう。メロエから、ニッブルから、そしてバルミラから、つまり、ヌビア、メソポタミア、シリアの都市から、三人の王がイエルサレムへ、ベトレヘムへ、恩寵の瞬間に与るべく、キリストの誕生に立ちあうべくして行なった旅を描いているのだから。聖なるものの再生の場に立つ三人は、中東の地を代表するものとして描かれる。それは、愛と芸術と権力の喪失を表わす。永遠なるものに対する、時の持続のもとの偽り、老化、悪化を⁵⁾、三人の王は各々の地、中東の地でみつめているとトゥルニエは語り、墮落と、類似のない像^{イメージ}と、廃位された王の地が⁶⁾、救済の一なる像（キリスト）を受けとる⁷⁾と語っている。そこでは、「時が聖なる永遠中に消えていた」⁸⁾のだ。この中東の地の旅を、ヨーロッパの言葉で——プラトン神学的な言葉でとも言えようか——このように20世紀の作者をして語らしめるに至った、ヨーロッパ人の旅とは

いかなるものであったのか。

キリストの誕生を示す星の導きによる旅なるものは、エジプトへむかうサン・シモニアンによって言表されていたものである。

エジプトには、墓とゆりかご、残骸と胚種……があります。これは、1799年、フランス共和国によって始められ、1833年、(アンファンタンによって招集された平和軍による) 目的意識を持って再開された新十字軍なのです。もはや「聖墳墓」で場所争いすることは問題ではありません。問題は、訪れて、秣おけを祝福することです。永遠に変容したイエス「御公現」の星に導かれて、新しい博士たちがその贈物を捧げようとしているのです⁹⁾。

静止した、死の中に置かれている東方の文明が西方の科学的活動(贈物)に結びつけられ、新たな世界が生まれる、ということか¹⁰⁾。東方の再生はキリストの再生に結ばれ、さらに西方の救済の根拠たるキリストの生そのものが新たな世界の生を産む、と考えられたと理解できよう。このサン・シモニアンは、ナポレオンによって始められたことだと言明している。しかし、ナポレオン・ボナパルトの試みは武力によって行なわれ、武力故に失敗したものではなかったか。時が永遠の中に消え、聖なるものの反照が人間の形に結ばれ、オリエント オクシデント 東方が西方と結合されて、世界が永遠の救済力に満たされることは、ヨーロッパの見はてぬ夢であったということか。

1799年のエジプト侵入の失敗が、時を画しているには違いない¹¹⁾。事実上エジプトを支配していたコーカサス出身のマムルーク達(軍事・行政長官として)の、主権を有するオスマン・トルコのスルタンに対する反逆と、エジプト在住のフランス人に対する不正に対して、エジプト支配者への報復と、スルタンの権威の回復と、イスラーム教を信ずる民の解放を口実に、1798年、ボナパルトは、ヨーロッパよりインドへの道を扼す地を軍事占拠する。その失敗の後、1882年のイギリス軍の軍事占拠までの間、この地はヨーロッパの占拠を企てる軍事行動の空白地となっている。この間ヨーロッパは、この地を近代化・西欧化させ、資本投下の対象としつづける。ボナパルトの軍事占拠に対しスルタンが派遣した軍隊の中より成り上ったムハンマド・アリーとその息子達のパシャ(総督)としての支配が、その窓口となったことが、多くのヨーロッパの旅人をこの地に招き寄せた。ムハンマド・アリー王朝の支配の拡大は、ヨーロッパがコンスタンティノープルに力のかすことで抑えられ、中東が力の均衡の場になるという図式が確立する。比較的安定した中東の支配関係は、この地の交通を安全なものとし、カイロ政府の西欧化政策は、この地でのヨーロッパ人の活動を安全なものにした。この裏づけのもとに、19世紀のヨーロッパ人は、より大胆に中東の地を旅していたと言ってよいだろう。

ボナパルトの軍事占拠の産物に『エジプト誌 (*Description de l'Egypte*)』があるのは、よく知ら

れたことである¹²⁾。ボナパルトがフランスよりひきつれた、科学・芸術委員会の委員が構成したエジプト学会がつくりあげた、この歴大なエジプトの博物誌は、19世紀のヨーロッパ人にとって中東がトポグラフィーの確かな対象となったことを私たちに示している¹³⁾。埋もれ、忘れられた文明のトポスが、ヨーロッパ人の手によって明るみに出され、記述され、旅人の明確な目的となったと知られよう。イギリスでは18世紀に、エジプシャン・クラブや、ディレクタント協会が、この種の活動をはじめていた¹⁴⁾。私たちは後で、そうしたものと旅との関わりを詳しくみることになる。

本書の取りあつかう時代の上限が、ボナパルトの軍事占拠とその失敗におかれるとすれば、下限は1882年のイギリスの軍事占拠に置かれる。もっとも、事の本質上というよりは、目印としてという方が良いのだが、旅が軍事行動の一部に組み込まれたり、軍事行動を通じて行なわれるという状況は、軍事行動をとまわぬ旅の状況と区別されようし、その意味で時代を区切る目印とここでは考えておきたい。では、1882年の軍事占拠とはいかなるものであったのか¹⁵⁾。

ナポレオン以降、英仏は互いに牽制しつつ、中東への直接介入の必要を認めなかったようにみえる。ロシアの中東進出に対しては、コンスタンティノープルを助け、これを阻止し、東方問題ではカイロ政府の自立を一部認める一方、コンスタンティノープルのカイロに対する支配力を基本とする中東状況を認め、弱体化したスルタンを支えていた。英仏の中東支配は、現地政府の西欧化政策を促し、そのための資金導入用の債券を発行させ、莫大な負債を負わせ、現地英仏の商業銀行を通じて、英仏主導の商業体系に組み込み、それを補助する領事に法的支配権を与えさせ、治外法権を拡大し、自治の要求をおさえこむ、という形をとっていたわけである。中東の近代化のための諸施設の中でとくに高くついたものが、カイロを中心とした鉄道の建設とスエズ運河の開削であったのは言うまでもない。前者はイギリスが、後者はフランスが、他をおしのけるように実現している（カイロ―アレクサンドリア線は1856年、カイロ―スエズ線は1857年¹⁶⁾、スエズ運河の完成は1869年）。スエズ運河という夢を現実のものにしたのはフェルディナン・ド・レセップスであるが、その計画がサン・シモニアンの指導者アンファンタンによるものであることは精神史の文脈上興味深い¹⁷⁾。アンファンタンは、この計画を進める中で、次のように考えていた、とシャルレティは述べている。

世界に新しい道を開くのは単に技師と金融家の仕事ではない。事業以上のことを解決しなければならない。一つの政治を始めなければならない。この政治はヨーロッパ再生の合図になるだろう。《われわれが懐胎し、われわれが孵化した卵を育てるために》、フランス、イギリス、オーストリアが互いに手を結ぶのだ¹⁸⁾。

この計画を進めながら、ムハンマド・アリーの子孫サイド・パシャの了解を取りつくと、サン・シモニアンとの関わりを一切否定し、強引にナポレオン三世の圧力を使い、コンスタンティノープルの妨害——裏にイギリスが居るのは言うまでもない——をはばみ、最後にはヘディーブ（副王）の称を与えられたイスマイルに巨額の負債を与えて、レセップスが「ヨーロッパ再生の道」を完成させたということになる。そして、借金で首のまわらなくなったイスマイルから、運河会社の株をロスチャイルドの金で買収したのが、アイズレリであったことは、よく知られたことである¹⁹⁾。巨額の貢納によってスルタンによりヘディーブとして独立を承認されたイスマイルには、すでに、スルタンの代理人としての権威はなくなる。トルコそのものが弱体化し、カイロも破産状態に陥っており、国家収入は担保として英仏の共同管理下にあった。すべてをもぎとられ、ヘディーブの地位は弱体の立憲君主にすぎず、エジプト人議員への妥協によってようやくイスマイルはその地位にあった。イスマイルがエジプトの独立を背景に英仏共同管理に対決するや、列強はスルタンを通じてイスマイルを解任、息子のタウフィークをヘディーブとし、ここにエジプト介入の途がひらかれた。1879年のことである。傀儡としてのタウフィークには統治能力はなく、混乱状態のエジプトは軍を握るオラビー・パシャが81年に決起、フランスの介入を嫌ったイギリスは軍隊を派遣、82年アレクサンドリアでの衝突でイギリス軍がエジプトを軍事占拠した、というのが時の流れであった。

この軍事占拠をもって、とりあつかうべき旅の世界の区切りとしよう。それは、この混乱の最中、一人のオリエンタリストが殺害されているからである。1869年から70年にかけて、モーセのエジプト脱出行を追ってシナイ半島からイスラエルの約束の土地へと調査旅行を行った、エドワード・ヘンリー・パーマー（1840-1882）のことである。このオラビー・パシャの革命に関与したロビイスト（と言っては失礼か）、ウィルフリッド・ブランド（1840-1922）がパーマー事件を次のように述べている。

パーマーは、スエズ運河の東に住むベドウィンの諸部族を買収するために英国政府（グラッドストーン内閣）、とりわけノースブルック卿によって派遣されたが、同行した二人の英人将校ギルとキャリントンもろとも、その任務遂行中に死を迎えたのだった。変装して旅をしていた彼らは三人とも捕えられ、ナフルのエジプト人長官の命令によって、砂漠で銃殺された²⁰⁾。

『エジプト学名士録』では、ただ盗賊に殺されたとのみ記されているが²¹⁾、みせしめにベドウィン数名が殺されており²²⁾、軍事占拠がいかに旅と旅人をその論理の中にまきこむか、そして、戦術・戦略によって旅がいかに自立した行為ではなくなるかを、この事件は教えてくれよう。イギ

リスの軍事占拠に反対し、オラビーを救い出し混乱のエジプトを託すべく策動するブランドは、以前のように自由には旅ができなくなり、エジプト入国を禁じられるに至っている。しかし、軍事占拠によって旅が変化したとしても、前に述べたように、それが本質的な変質を意味するところで結論づけようというのではない。ここではひとまず、本書が取りあつかう旅は、1798年のフランスのエジプト軍事占拠以降、1882年のイギリスの軍事占拠以前の旅であり、軍事行動をとまわぬ旅である、と指摘しておくにとどめたい。

最後に旅のテキストについて述べておくことにしよう。そのためには、中東を旅した者の中で最も著名な者の一人、ヨーハン・ルードヴィヒ・ブルクハルト（1784-1817）にふれぬわけにはゆかない。この人物の旅については後で詳しく述べるが、彼の1冊の旅行記との、ロンドンの古書店での出会いが、本書の研究の出発点であった。この出会いは、旅の研究の出発点をさし示す、ある確かさを与えてくれていた。それは旅の進行と対象世界の記述のしたたかさが、まず読む者に迫ってくるということによる。詳細な民族誌とは異って、人の歩みに従って展開される記述の連続、ドラマティックな一日が終っても、一夜が明ければ再開される日々の記録の連続、目にふれるもの、口にされるもの、耳にするもの、そのすべてを記述せずにはおかない、といった終りのない連続、それらが彼の旅行記を形づくっている。1809年3月にイギリスを出発してから、1817年10月カイロで死去するまでの8年7ヶ月、シリア、パレスティナ、アラビア、シナイ、エジプト、ヌビアと、本書が取りあつかうすべての地を旅し（何故かエジプトの記述がないが）、3冊の旅行記を書いたスイスの一青年の、そのテキストこそ、その上に積みあげられるべき旅の世界の基礎たり得たと言うにふさわしい。彼の使用した言語は英語——一部性器の加工について述べる際にのみラテン語が使われている——である。バーゼルに生れ、ローザンヌ育ちの彼にとって、英独仏の3ヶ国語は区別されるものではあり得なかったであろうが、本書においては記述言語の英語を優先させることにしよう。

従来の中東研究には欠かせない、フランスのオリエンタルな、異国趣味の風景には、その征服したアルジェやモロッコが交っているということが重要な問題であるように思われる。そのオリエンタルなアラブ世界は、北アフリカにおいてもふれられ、ドラクロワの豊かなオリエンタル主題の絵画として結晶した²³⁾。それに、フランスの北アフリカ軍事征服（1830年）は、ナポレオンの伝統をついでいた。この点については、フランスの作家ガスカールが次のように述べている。

（ルイ・フィリップはフランスの作家たちを政府の費用で征服地に招待し）作家たちを植民地の企てに参加させて、文化の化身たる彼らとその地にいるということによってフランスの行為の教化的な性格を強調しているのだ、という印象を彼らに与えるのだ。……彼らの方は、アルジェリアを自分たちの作品の中に登場させることによって、この国の名を永

久に不滅のものにしようとしているのだ、……この国に、唯一価値のある世界、すなわち文学と芸術が創り出す世界の中に一つの場所を与えようとしているのだ、というふうに考えたがる。……画家たちは……フランスの大衆に、以後彼らのものであるかのマグレブの地を、彼らのカンヴァスの中に望見してもらおうとする²⁴⁾。

従って、フランス語をテキストにするオリエントの旅は、別な問題として整理されるものであることが理解されよう²⁵⁾。とは言え、本書の対象からフランス人の旅行記を全く排除する、というつもりではない。当時の英語化されたテキストはもちろん本書の対象となっている。その他の言語のテキストも同様である。しかし、本書は旅のテキストの完全なアンソロジーを旨とすとか、あるいはそれを前提にする、といった研究ではない。膨大な旅行記の中の一部から、とにかく旅がつくり出す他者世界の組み立てを明らかにしようとする意図しているにすぎない。同様な研究は種々のテキストの選択により、また、別の地の選択により、別な時代の選択によっても行なわれるであろう。

プロローグ 注

人名および地名の読みは、本書では基本的には、旅行者の使ったスペルをそのままカタカナ化した。マホメットやナザレは例外である。

聖書引用は、特に記さぬ限り、日本聖書協会発行の口語聖書を使ったが、固有名詞は同協会発行の新共同訳聖書によった。多くの旅行者は、イギリスの欽定訳を使用しているので、B. B. Kirkbride Bible Co.発行の *The Thompson Chain-Reference Bible* (King James Version, KJV と略記) も利用した。各書は、通例に従ったが、『レビ記』のみ『レヴィ記』とした。

コーランは、岩波書店発行の、『コーラン』(井筒俊彦訳)を使用し、引用もそれに従った。

- 1) いささかあいまいなこの言葉は、ヨーロッパの観念の歴史ヒストリ・オブ・アイディアズのコンテキストでは、アンビアンスという言葉に置き換えることができよう。フィロロジストのレオ・シュピツァーが明らかにしてくれている。cf. Spitzer, 1948.
- 2) 例えば、文化人類学者ファビアンは、空間的な距離だけでなく、時間的距離をも問題にしている。cf. Fabian, 1983, p.121.
- 3) セール, 1985, 117頁。
- 4) セール, 1985, 14-15頁。
- 5) トウルニエ, 1983, 75頁。
- 6) トウルニエ, 1983, 221頁。
- 7) トウルニエ, 1983, 76頁。

- 8) トウルニエ, 1983, 172頁。
- 9) シャルレティ, 1986, 230頁。(以下特にことわらない限り, 本書では引用文中の () 内は筆者の補入を示す)。「聖なる墓所」を「聖墳墓」に変えた。ここに建てられた教会の名とともに, この方が一般的であろう。
- 10) シャルレティ, 1986, 218-219頁参照。
- 11) 以下の記述は, 次の書に依った。ムアヘッド, 1976。両角, 1982。岩永, 1984。Richmond, 1977。
- 12) 両角, 1982, 219頁。
- 13) エドワード・サイードが, その記述の意味について詳しく論じている。テキストの内に, 他者としてのオリエンタを, ヨーロッパの周囲にとり込む力をみているものと評価しておこう。cf. Said, 1978, pp.80-87。
- 14) cf. Searight, 1979, pp.74-75。
- 15) 以下の記述は, 次の書に依った。ブランド, 1983。Richmond, 1977。Robinson & Gallagher, 1981。
- 16) ルイス, 1967, 170頁。ルイスは, 1882年までにエジプトの鉄道は, 1000マイルを越えた, と述べている。1848年の時点でのフランスの鉄道は1860キロ (1160マイル) であったことと比較して面白い。イギリスでは1830年代に1000マイルを越えているようだ。シャルレティ, 1986, 300頁, 小池, 1979, 29頁参照。
- 17) シャルレティ, 1986, 301-303頁。
- 18) シャルレティ, 1986, 321頁。
- 19) モートン, 1975, 135-137頁。
- 20) ブランド, 1983, 18-19頁。
- 21) cf. Dawson & Uphill, 1972, p.221。そこでは, パーマーの話は T. E. ロレンス (アラビアのロレンス) の話に優ろう, とされている。
- 22) ブランド, 1983, 19頁。
- 23) cf. Trapp, 1971, pp.112-116。
- 24) ガスカー, 1984, 193頁。
- 25) 旅行記はとりあつかってはいないが, Thomson, 1987を参照されたい。